

## 夏秋どりパプリカの養液栽培

農業・園芸総合研究所

### 1 取り上げた理由

国内のパプリカの産地は西南暖地に多く夏秋期は国産のパプリカが品薄傾向にある。宮城県の気候は東北地方の中では比較的冬が温暖で夏の高温期が短い特色があり、その気候を生かせる品目としてパプリカの夏秋どり栽培が上げられる。パプリカの夏秋栽培はすでに報告済み（普及に移す技術 第 77 号「パプリカの夏秋栽培」）であるが、パプリカは土壌病害に弱いことから、土壌病害対策と収量増加に効果がある養液栽培を利用し、パプリカの夏秋どり栽培を検討したところ、栽培技術を確認することができたので普及技術とする。

### 2 普及技術

1) 養液栽培を利用した場合のパプリカの夏秋どり栽培の作型を図 1 に示した。

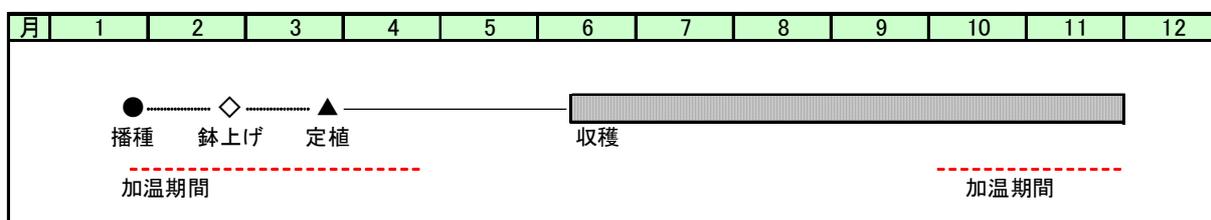


図 1 養液栽培におけるパプリカ夏秋どり栽培の作型

- 2) 播種は 1 月下旬にセルトレイに一粒ずつ播種し、約 1 ヶ月後に 10.5cm 程度のポットに鉢上げを行う（図 1）。
- 3) 育苗中は最低夜温 18℃程度、日中温度は 25～26℃程度をめやすに管理する（図 2）。
- 4) 育苗中の培養液濃度は EC1.2 dS・m<sup>-1</sup> とする。
- 5) 定植は 3 月下旬に第一花開花初め程度で行う（図 1）。
- 6) 定植から第 1 果肥大期頃までの培養液濃度は EC1.2 dS・m<sup>-1</sup> とする（図 3）。
- 7) 第 1 果肥大期頃以降の培養液濃度は EC1.2dS・m<sup>-1</sup> から EC2.4dS・m<sup>-1</sup> の範囲で草勢および排水の EC を見ながら管理する（図 3）。
- 8) 第 1 着果節から第 2 着果節までは摘花し、第 3 着果節以降は草勢をみながら摘果を行う。
- 9) 栽植様式は 3000 株/10a 程度（条間 180cm, 株間 18.5cm）の 2 本仕立てとする（表 1）。
- 10) 加温は定植後の春期は最低気温を 18℃の高めに、栽培後期の秋期は最低気温 15℃を目安に行う。
- 11) 図 1 に示した作型で一連の栽培管理を行うことにより、10a 当たり 10 トン前後の収量を得ることができる。

### 3 利活用の留意点

- 1) 養液栽培システムは、軽装備なフィルム製の栽培ベットを使用し低コスト化を図った改良型宮城型養液栽培システムを用いた。
  - 2) 経営試算は低コスト生産が可能な軒高パイプハウスに改良型宮城型養液栽培システムを導入した場合を想定し試算した（表 2）。
  - 3) 商品果収量が 10 t/10a を想定し、平成 15 年と平成 14 年の仙台中央卸売市場の国内産ジャンボピーマンの平均単価（499 円/kg）を用いて試算した（表 2）。
- （問い合わせ先：農業・園芸総合研究所 園芸栽培部 野菜チーム 電話 022-383-8132）

#### 4 背景となった主要な試験研究

##### 1) 研究課題名および研究期間

新品目と大規模利用に対応した宮城型養液栽培システムの改良（平成14年～平成16年）

##### 2) 参考データ

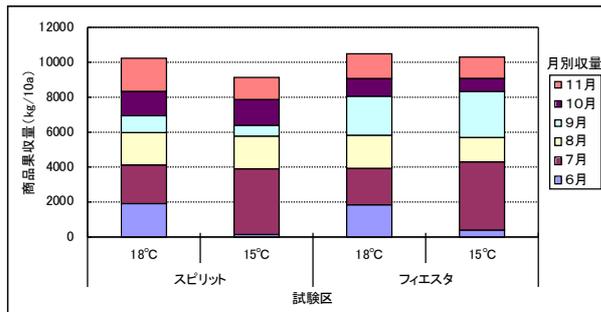


図2 育苗温度の違いがスピリットおよびフィエスタの商品果収量に及ぼす影響（試験年度：平成16年度）

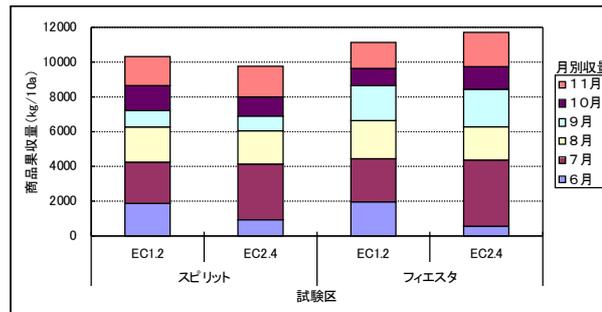


図3 定植後の培養液濃度の違いがスピリットおよびフィエスタの商品果収量に及ぼす影響（試験年度：平成16年度）

表1 栽植様式がスピリットおよびフィエスタの収量に及ぼす影響

栽植株数	スピリット					フィエスタ			
	仕立て本数 (本)	平均果重 (g)	商品果収量 (kg/10a)	総収量 (kg/10a)	商品果率 (%)	平均果重 (g)	商品果収量 (kg/10a)	総収量 (kg/10a)	商品果率 (%)
2000株/10a	3	132	8306	9454	88	140	7430	8201	91
3000株/10a	2	167	9051	10728	84	143	8483	10599	80
4000株/10a	2	140	10395	11670	89	131	7519	9519	79

(試験年度：平成15年度)

表2 改良型宮城型養液栽培におけるパプリカ栽培の経営試算

パプリカ (10a)		
	金額	備考
粗収益	4,990,000 円	(10トン×@499円)
経営費	3,326,633 円	改良型宮城型養液栽培システムは2,000,000円、減価償却は第5版宮城県営農基本計画指標に準じて7年とした。
農業所得	1,663,367 円	
所得率	33%	

耕種概要：

栽培品種は大玉品種の「スピリット」(赤)および「フィエスタ」(黄)を用いた。培地はヤシがらを、培養液は大塚A処方を用いた。

##### 3) 発表論文等

第4回パプリカセミナー

平成16年園芸学会東北支部会